満照寺不動堂（黒田不動堂）　一棟

指　定　昭和三十年十二月二十七日
所在地　いわき市田人町黒田字別当
所有者　満照寺

江戸時代
床面積　三九・一九㎡

満照寺不動堂は総欅造りの一面の長さ六・二六ｍの三間四面堂で、四周の廻縁で造られている。屋根は単層の宝形造りで茅葺き、基壇の上に建つ。

周囲の柱は粽付きの円柱一二本が立てられ、軸組は地覆、腰貫、内法貫、頭貫に台輪が回され、木鼻もつけられている。斗栱は出組、拳鼻付き、中備は中の間に動物の彫刻のある蟇股で、両脇の間には蓑束が配され、化粧垂木は二軒繁垂木（背返し）で、軒の出も大きい。正面中央には観音開きの、動物など浮彫りのある桟唐戸、左右脇の間に格子付花頭窓が設けられ、両脇側面の中の間に板引違戸を付け、その外はすべて竪板壁で、内部の床は板張りである。頭貫、台輪、小壁、斗栱、丸桁には彩色が施されているが剥落が目立つ。

内部は奥一間通りを内陣として、中央に方一間の厨子を造りつけ、身舎中央に護摩座を置く。二本の来迎柱を建て虹梁を架け渡し、斗栱は二手先組と出組で受ける。竜と唐獅子の掛鼻が付けてある。来迎柱には金箔を押し、斗栱、長押、虹梁、台輪など全部に胡粉下地の彩色が施され華麗を極めている。内陣には、右手に利剣、左手に索を把持し、火焔光背を負い、瑟瑟座に坐した本尊不動明王坐像が安置されている。

天井は中央が鏡天井、四周は格天井となっており、これに飛天や丸竜等の彩色絵が描かれている。

地元に伝えられている記録によると、大聖寺別当不動堂として元禄十四年（一七〇一）に建立されたことがわかる。

元禄期の華やかな建築様式が覗える三間四面堂である。

住吉神社本殿　一棟

（附）棟札木簡八枚

指　定　昭和三十三年八月一日

所在地　いわき市小名浜住吉字住吉

所有者　住吉神社

江戸時代・寛永十八年（一六四一）

三間社流造り

住吉神社は市内に鎮座する延喜式内七社の一つとして知られている。拝殿と幣殿は近年の造営であるが、本殿は江戸初期の桃山建築の遺構を伝えている。三間社流造り、屋根は銅板葺き、棟は箱棟で千木が付けられている。三面に廻縁を巡らし脇障子や組高欄も設けられている。斗栱は平三斗、連三戸、出三斗と多様であり、入側には海老虹梁が架け渡されている。妻飾りは二重虹梁、大瓶束、三ツ花、鏑懸魚をつけ、鰭まで付加されている。正面中央一間には金具を打ち付けた板唐戸があり、左右の間軸組三面欄間、脇障子や胴嵌め板には、元文五年（一七四〇）に後補された四天王、花、瑞獣等の彫刻がはめこまれ、向拝、各円柱、大瓶束等にも後補の唐獅子、象鼻等の掛鼻や手挟等が付加され彩色も施されて華麗を極めている。棟札、木簡の墨書銘によると、寛永十八年（一六四一）内藤政興が社殿を再建し棟梁田口吉左衛門、木田与兵衛等が建築に関与している。

建築様式は、三間社流造り折衷様式である。

高蔵寺三重塔

一棟

指　定　昭和五十六年三月三十一日

所在地　いわき市高倉町鶴巻

所有者　高蔵寺

江戸時代・安永三年（一七七四）

高蔵寺観音堂は、寺伝によると大同二年（八〇七）徳一によって開かれ、以後観音霊場として栄えた。応永年中（一三九四～一四二七）に堂塔の改修が行われ、江戸時代には幕府より朱印三〇石を拝領している。地元の長子村で作られた相輪の伏鉢に刻銘されている銘文から、安永三年（一七七四）に建立されたことがわかる。

塔は三間四面の三重塔姿で、屋根は柿葺きであったが、現在は銅板葺きに修理されている。初重の四周には擬宝珠高欄を付した縁（後補）があるが、二重、三重には高欄がない。対辺四〇cmの八角形の心柱と、各層とも十二本の円柱を建て、切目長押・腰貫・台輪を回し、斗栱は尾垂木付折衷様三手先組で中備はない。軒は二軒繁垂木（指木無し）、初重正面中央には両開きの桟唐戸、左右脇の間に雲版様の花頭窓、両脇面側の中の間に引違戸を付け、その外はすべて板壁で、床は板敷きである。

内部には観音堂から移した比較的大きな厨子があり、心柱は初重の本梁で受けている。四天柱と天井はなく、厨子の中には木造徳一大師坐像が安置されている。

相輪は露盤、伏鉢、受花と宝輪が大きく、その上に蓮弁と火焔宝珠をおく。

高蔵寺三重塔に比肩すべき塔は、県内には東和町の隠津島神社三重塔（県指定）と、会津高田町の法用寺三重塔（県指定）の二棟が存在するが、浜通りにおいては江戸時代唯一のもので、建築様式は当時の折衷様を主体とした地方色を表現している貴重な建造物である。

旧樋口家住宅　一棟

指　定　平成十九年四月六日
所在地　いわき市鹿島町下矢田字散野
　　（いわき市暮らしの伝承郷内）
所有者　いわき市

江戸時代後期
桁行　一二・七二m、梁間　七・八七m
床面積　一〇〇・二五㎡

この住宅は、もとは遠野町入遠野字中野地内にあって、当地方特産の磐城延紙の生産をしていた兼業農家だった樋口家が昭和六十一年まで暮らしていた。

創建年代は、棟札等の資料が無く明らかではないが、樋口家の口伝などから十九世紀前半と推定される。

当時、棚倉藩領だったこの地方の製紙産業は有名であった。天明八年（一七八八）幕府の巡検使に随行した古川古松軒の記録の中に「この辺の民家少し宜し」と書かれた所の民家であろう。

土間には竈と楮竈があり竈柱が建つ。板張りの中の間と勝手、そして上座敷と奥座敷と、直屋平入り三間取りの当時の農家の典型的平面形で、主体部の変格は少なく創建時の部材が多く残っている。規模が小さいにも関わらず大きな改造が少なかったのは、住居としての完成度が高かったためと思われる。

したがって、創建時におけるこの地方の兼業農家の生活様式を知る上で貴重な民家である。

絹本著色 塙保己一像　一幅

指　定　昭和三十年二月四日
所在地　いわき市勿来町窪田西殿町
所有者　個人

江戸時代・文政四年（一八二一）
総縦　一七二・七㎝、総横　五五・七㎝

塙保己一は江戸中期の国学者で、本姓荻野氏、のち師匠・須賀一の姓を名乗り塙氏と称した。延享三年（一七四六）武蔵国児玉郡保木野村（埼玉県本庄市児玉町保木野）に生まれ、通称寅之助、七歳で失明し、十二歳で母を失った。江戸へ出て雨宮検校須賀一の門人となったが、音曲・針治には意を用いず文学に専念し、山岡明阿や賀茂真淵などに師事した。後、幕府の許しを得て和学講談所を興し、多くの門下生を教授し、屋代弘賢・中山信名などの碩学を出した。『皇親譜略』『花吹松』『蛍蠅抄』等の著があり、古書の校正刊行も少なくない。また、古書の散逸を防ぐため『群書類従』六三五巻の刊行を全うしたが、『続群書類従』は資料の収集のみで刊行には至らなかった。文政四年（一八二一）二月総検校となったが、同年九月十二日七六歳で没した。法号は和学院心眼明光居士、正四位を贈られた。

本図は中回し金襴、天地緞子仕立である。画像は頭巾をかぶり、中啓を持った総検校の正装を斜向に描いたもので、温雅な大学者の風貌が良く表現されている。画面の右下には「住吉内記」「藤原広定」の方印があるので、住吉広貫の筆であることがわかる。広貫は土佐派の画家で、初名は広定（弘定）・内記とも称した。古土佐の風を慕い手腕をふるった幕末の絵師で、土佐派近来の妙手と賞された。文久三年（一八六三）七一歳で没した。

保己一の総検校就任は文政四年二月で、九月には没したため、この間の作品と思われる。時に住吉広貫一九歳であった。

木造釈迦如来坐像　一躯

指　定　昭和三十年十二月二十七日
所在地　いわき市平四ツ波字石森
所有者　忠教寺

鎌倉時代（十三世紀）
像高　五七㎝

磐城山忠教寺は、寺伝によると徳一によって開かれた寺で、現在は臨済宗の寺である。

釈迦は仏教の開祖で、「釈迦牟尼」または「釈尊」と称し、仏陀・世尊・如来等の尊称がある。釈迦はインド北方の小国カビラ城にて、父・浄飯王、母・摩耶婦人の太子として生まれたが、生後七日にして母后に死別した。幼名を悉達多と称し、学術武技を修めたが、内省的で長ずるに従って瞑想的になった。十九歳の時結婚して一子をもうけたが、人生の無情や苦に対する省察はいよいよ深く、解脱の道を求めて出家した。苦行林で六年、仏陀迦耶の菩提樹下に静座して内観につとめた。その時多くの魔の妨害を退け、解脱の明智を内証して仏陀となった。その明智は一切の存在を相依相待の縁起として把握することであって、人生のあらゆる問題をこの根本原理の上に如実に観察することであった。そののち入滅に至るまで、万人の強化に専心したのである。

この釈迦如来坐像は、木造寄木造りの漆箔像である。お顔は額に白毫があり、眼は玉眼で端厳の相を示している。通肩の衲衣は写実的である。手印や面部、胸など肉身部は後世の修補で、一部に削り直しがあったのではないかとみられるが、鎌倉時代の制作と思われる。

元禄元年（一六八八）に、磐城平藩主・内藤義孝が寄進したものである。

木造釈迦如来坐像及び阿難尊者立像・迦葉尊者立像　三躯

指　定　昭和三十年十二月二十七日
所在地　いわき市山田町蔵ノ内
所有者　楞厳寺

南北朝時代（十四世紀）

中尊像高　八四・八cm、脇侍各像高　九四cm

釈迦如来は普賢菩薩と文殊菩薩を脇侍とする場合と、本像のように迦葉と阿難の二尊を脇侍とすることがある。

迦葉尊者は摩訶迦葉尊者とも呼ばれ、頭陀第一で、樹神に祈って得た子である。はじめ婆羅門の学士としてその真髄を極めたが、釈迦の説法を聞いて道を改め、仏門に入り、その深奥を極めて釈迦十大弟子の随一と称されるに至った。釈迦の没後、仏門の長者に押され、阿難尊者とともに仏教の教典を編集した。

阿難尊者は釈迦の従弟で、生来怜悧、博学強記であった。後年釈迦について仏門に入り、釈迦五五歳の時より二〇余年間侍者となり、東西の化導に随行した。後に釈迦十大弟子に数えられ、迦葉尊者についで仏門の長者に押されたという。

中尊は木造寄木造り、漆箔の坐像で玉眼入り、施無畏印を結んでいる。衲衣は首から両肩にさがる通肩である。白毫・肉髻があり、切付の螺髪は頭に比すれば大粒だが刻みが浅い。顔・胸・手等には後世修理の金箔が残っている。光背・台座は江戸時代の補作と思われる。

阿難尊者立像は、金剛合掌で壮年の僧形で、迦葉尊者立像は目縛印掌で腰を少しかがめた老僧の姿に造られている。いずれも玉眼入り彩色の像で、円光背と台座は江戸時代の補作と思われる。

本像の制作期については、衲衣の処理に保福寺の薬師如来坐像（県指定）や、惣善寺の阿弥陀如来坐像（県指定）と相通ずるものがあることから、南北朝時代の作と思われる。

木造金剛夜叉明王立像　一躯

指　定　昭和三十一年九月四日
所在地　いわき市勿来町酒井出蔵
所有者　蔵皇神社

鎌倉時代（十四世紀）
像高　八七㎝

蔵皇神社の創建は、大同二年（八〇七）に大和国金峯山から菊田郡犬養山に蔵王大権現を奉遷したと伝えられる。正嘉二年（一二五八）の火災によって社殿その他が焼失したため、現在の地に遷座したという。また当社は、蔵王社・蔵王堂とも称し、出蔵寺境内の堂宇の一つであったが、明治初年の神仏分離の際に蔵皇神社となった。

本像は岩座に立ち、御尊顔は三面で忿怒の形相をあらわしている。眼は彫眼で、髪は怒って逆立つさまをたたき出しの手法で一気に彫りあげている。衣文の刻みは流暢を欠き、粗雑な感じは免れない。後頭部や肩の後の部分は荒削りで、鉈彫りを思わせる。右手は腕の一部を残しているが、左手は肩の付け根から欠け、足も先が欠け顔にも損傷がある。髪の一部に朱彩、眼や歯の凹部に白彩が残されていることから、当初は彩色の像であったと思われる。

本像は三面ではあるが六臂でも五目でもなく、頭上に馬王の髻もないことから、これは三面の蔵王権現像で、金剛夜叉明王としたのは誤りである。

また本像の制作期は、裳裾の衣文や様式からみると、文保二年（一三一八）の長谷寺（常磐上湯長谷町）の十一面観音立像（県指定）や、原町市泉竜寺の十一面観音立像（県指定）に通ずるものがあり、鎌倉時代末期の作と思われる。

木造薬師如来及び両脇侍像　三躯
天部立像　二躯

指　定　昭和三十六年三月二十二日
所在地　いわき市平上高久字作ノ入
所有者　浄　日　寺

平安時代（十二世紀）
薬師如来像高　七五cm
脇侍像高　八八～九〇cm
天部像高　八九cm

この薬師如来像は、明治初期に廃寺になった薬王寺末寺の日光山自性院光山寺（真言宗智山派）の薬師堂に祀られていた。同寺は、日光権現（現在の日光神社）の別当であった。江戸中期の記録によると薬師堂は三間四面で、一間四方の拝殿があった。

薬師如来は寄木造りの坐像で、肉髻が大きく豊かな顔、衣文の流れるようなひだは彫りが浅く、よく藤原様式を伝えている。膝裏に「奉修福　文和二癸巳　六月一日　仏子孫四郎　絵師覚山」等の墨書銘がある。文和二年（一三五三）は、南北朝時代の動乱期であった。また、「修福」は「修覆」の意と思われる。

脇侍の日光・月光は同じく寄木造りの小形像で、一木造りの面影をのこしている。

二天部の一つは頭部を欠くが、持国天と多聞天と思われる。五躯とも損傷が多く、光背・台座・侍物を失っているが、白水阿弥陀堂の諸仏と共通点がみられ、貴重な遺品である。

木造十一面観音立像（もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう）　一躯

指　定　昭和三十六年三月二十二日
所在地　いわき市常磐上湯長谷町堀ノ内
所有者　長谷寺

鎌倉時代・文保二年（一三一八）
像高　一七二㎝

本像は長谷式十一面観音像で、寄木造りの彫眼、足はさし足で、材質はカヤ材を用いる。口唇に朱を、鼻下のひげと肩にかかる垂髪（すいはつ）は墨で描いた、いわゆる檀像彫刻である。寄木の手法は両肩、腕、及び背面を合せ、頭部も耳の前で前後に張り合わせ、内刳（うりぐ）りを施しさし首になっている。宝冠（ほうかん）は三方に二重の菊花が刻まれ、十面の化仏（けぶつ）は当時のままである。腕は豊満で丸みを帯び、上膊部（じょうはくぶ）に腕釧（わんせん）を彫りだし、肩から腰の衣文（えもん）、腰から下の裳（も）はゆるく反転して彫りが深い。天衣（てんね）は仏体と同木であるが、接合部に破損がみられる。彫刀の冴えは見事で、鎌倉末期の特色である写実的表現に優れている。

像の胎内・足先の裏面に六七三字の墨書銘（ぼくしょめい）があり、その一部は次のとおりである。

「奥州東海道岩崎郡長谷村観音堂徳一大師建立所也」「文保弐年戊午二月十日奉造立始、同戊午三月十七日大願畢」「造立檀那滝山千日大峯一僧祇行人大阿闍梨頼賢慶南房　仏師大輔法橋能慶」「祖父隆泰　隆時　隆綱　泰久　祖父永真祖母明連比丘尼」

これら長文の墨書銘により、長谷村観音堂は徳一大師の創建で、仏像の造立は文保二年（一三一八）、檀那（だんな）は大峯山で千日修行をした頼賢慶南房で、仏師は能慶であることがわかる。そして、岩崎氏と僧が造立に関与したことが明確になり、岩崎氏系図の欠が補われ、造立の年代、檀那、結縁衆、作者が判明した。これ程墨書銘の多い類例も少ないことから、仏教文化と歴史的資料の両面から極めて高い評価をうけている。近年、光背・岩座・錫杖（しゃくじょう）が補われ像容を一新した。

木造観音菩薩半跏像（滝見観音）　一躯

指　定　昭和三十八年三月二十日
所在地　いわき市小名浜林城字大門
所有者　禅長寺

室町時代・応永十七年（一四一〇）
像高　六四㎝

この観音菩薩は、滝見観音とも称されている。半跏像とは左足をふみ下げ、右足を折ってその足首を左膝に乗せて坐った像をいう。本像は鎌倉時代末期から室町時代にかけて盛んに画題に選ばれた滝見観音を彫刻したもので、従来の仏像とは趣が異なり、絵画的・鑑賞的に表現されている。このような例には鎌倉市東慶寺の木造水月観音像（神奈川県指定）、郡山市中田町駒坂観音堂の水月観音像（県指定）などがある。

禅長寺仏殿に安置されている本像は、右手を右斜め後方につき、左手を膝の上において体をやや斜横に倒し、岩座の上に半跏して滝を眺めている姿である。

ご尊顔はやや面長な豊頬で、可愛らしく美しい。細い切れ長の眼には玉眼が入っている。頭の宝髻は高く宝冠をいただき、胸には瓔珞を付けている。膝に掛かる衣や岩座に長く複雑に垂らした彫りの浅い衣には、土紋彩色による花鳥文や唐草文が盛りあげの手法によって表現され、当代の典型的な特徴がみられる。光背は雲文を透し彫りにし、化仏を配している。

胎内に造像銘札があり、次のように記してある。

（表面墨書）　西方仏師　備後律師院尊作之
（裏面墨書）　応永第十七年正月十三日　造立丁（花押）

本像は応永十七年（一四一〇）一月十三日に仏師院尊が制作したもので、当時の典型的な様式手法を示し、室町美術の先駆的役割をなす作品として美術史上重要である。また、当時禅長寺が鎌倉建長寺の末寺であったことから、来路は極めて明確である。なお、当寺は江戸時代初期に大覚派から妙心寺派に転派した。

木造聖観音菩薩坐像　一躯

指　定　昭和五十一年五月四日
所在地　いわき市遠野町上遠野字根小屋
所有者　円通寺

室町時代（十四世紀）
像高　七八㎝

檜材寄木造り、両袖先と膝部を矧ぎ合せ、頭部は首柄で体部に差し込む。高い宝誉を結い、宝冠、首と胸に瓔珞を付け、玉眼を入れる。姿勢は左手を軽く結んで蓮華の蕾をもち、右手で花を開こうとする通例の像容となっている。

注目されるのは面長な女性的顔貌、両肩を被って流れる柔らかい衣文の表現と、その両袖、裳裾を台座から垂れる垂下様式になっていることである。勝行院（常磐湯本町）の釈迦如来坐像（県指定）の場合は、両袖先を直接長く垂らし、裾先も二重に垂下するが、この像の場合は、一度両膝にかけて裳懸座風に垂らし、裾先の垂下も短く一重になる新しい様式を示す。

また、浄智寺（鎌倉市山ノ内）の過去・現在・未来を象徴する三世仏像（弥陀・釈迦・弥勒）や、覚園寺（鎌倉市二階堂）の日光・月光像の場合は、両袖先の垂下はなく、裳裾のみを左右対称に長く垂らす方式をとっているから、垂下方式も種々あったことがわかる。

円通寺は、大同二年（八〇七）徳一の開基と伝えられ、永享十二年（一四四〇）二月、真言宗願行流佐久山方の宥徳上人により再建され、土地の豪族上遠野大炊頭の庇護を受けたという。聖観音はこの再建期の室町時代初期の制作と考えられる。高い宝誉、面相、耳朶の薄い造り、台座などはその時代の特徴を示している。

ともあれこの聖観音坐像は、北関東の仏像彫刻史上、垂下様式の一つの展開過程を示す貴重な資料である。これはやがて両袖先だけを垂下する相応寺（安達郡大玉村）の薬師如来坐像（宝徳四年（一四五二）四月）に影響をあたえたものと推定される。

木造釈迦如来坐像　一躯

指　定　昭和五十一年五月四日
所在地　いわき市常磐湯本町三函
所有者　勝行院

南北朝時代（十四世紀）
像高　八五㎝

勝行院を開山した円鏡は寺の近くに釈迦堂を建て、堂内に釈迦三尊を安置した。この釈迦堂は寛政十年（一七九八）に火災に遭い、文化年間（一八〇四～一八）に再興した。しかし、勝行院が戊辰の役で焼失したため釈迦堂を移し、一時勝行院の本堂とした。

釈迦如来坐像は寄木造りの漆箔で、玉眼を入れ、肉髻は低く小さく、うずまき型の螺髪の線が額正面の生えぎわで軽くカーブする。面貌は鼻すじがとおり、口元は引き締まる。

両肩から腹部に流れる衣文の彫刻、腹帯をのぞかせ、定印の指の爪先を長く伸ばすなど、中国宋風の影響を強く反映した、鎌倉末期から南北朝時代にかけての特徴を示している。ことに特徴的なのは、両袖先と裳裾の先を幅広く長く垂れる垂下様式になっていることである。垂下様式は中国宗画の後期宋朝様式の影響を受けて、禅宗高僧の肖像画、彫刻に影響をあたえ、特に鎌倉を中心に制作された。両袖先と裳裾を直接垂下する様式が古く、ついで台座の上で矧ぎ合わせた裾先のみを裳懸座風に垂下する新しい様式が発展した。先行形態のものには光厳寺（東京都あきる野市）の釈迦如来坐像（康安二年（一三六二）、法印運朝銘、像高五一・五㎝）、来迎寺（神奈川県鎌倉市）の地蔵菩薩坐像（応安四年ヵ、絵所宅間掃部法眼浄宏作、像高一〇二㎝）などが見られ、勝行院の釈迦像は前者に勝るとも劣らない。

光厳寺の釈迦像同様猫背で胸幅は広く、量感も充分で堂々としており、南北朝時代を下らない制作年代と思われる。飛天透し彫りの光背、台座も中国宋風を模倣した同時代のものである。地元の伝承では、運慶の作と伝えられてきた。

木造阿弥陀如来立像　一躯

指　定　昭和五十九年三月二十三日
所在地　いわき市四倉町玉山字牧ノ下
所有者　恵日寺

鎌倉時代・文永元年（一二六四）
像高　五二㎝

甚光山恵日寺は真言宗智山派の寺で、徳一の開基と伝えられ、永徳年間（一三八一～八四）に甚恵が中興した寺院である。江戸時代には二〇石、門末四五ヵ寺を有し、昭和二十年に本堂は戦災に遭い、本尊であった大日如来も共に焼失した。本堂が再建されたのは昭和三十九年であった。

この阿弥陀如来立像は、木造寄木造りの漆箔像で、八角形の台座に立ち、火焔様の舟形光背を負っている。玉眼入りの目はやさしく、ふくよかな頬は慈しみのある御尊顔である。

本像の特徴は胴部と下脚部が別々に造られ、下脚部を胴部に差し込むようになっていることである。衣文を写実的に表現するためにこのような手法をとったと思われる。

脚部の内側前部に花押があり、胴部の内側背部に「奉迎年ハ、文永元年甲子八月十五日、公慶」の墨書銘がある。文永元年（一二六四）に造られた仏像で、在銘では、いわき市内最古の仏像である。

なお本像は、承応三年（一六五四）会津の桂林寺の僧、単誉が恵日寺に寄進したものであり、胎内には一三枚の印仏が納められていた。

木造薬師如来坐像　一躯

指　定　昭和五十九年三月二十三日
所在地　いわき市小名浜住吉字新町
所有者　保福寺
鎌倉時代・正中三年（一三二六）
像高　七二・八㎝

保福寺の薬師如来坐像は、木造寄木造りの漆箔像で、柔和な顔容を示している玉眼入りの像である。胎内には薬師小児の種子（梵字）や、「□□三年丙寅卯月二十八日比丘善来生年七十□」の朱書銘があり、また「檀那隆連　比丘善来造立」「仏子院誉」の墨書銘、応永二十一年（一四一四）の修理銘がある。檀那隆連は、暦応三年（一三四〇）の岩崎隆連女子弟熊訴状（岡本氏文書）によると、「岩崎郡内金谷・津々良（綴）・秋山・後田（御殿）・高坂・輪蔵（宮町地内）」と記され、六ヵ村の地頭であった。また、「仏子」は「仏師」である。

仏師院誉は慶珊寺（横浜市金沢区）の十一面観音像の胎内銘に「正慶元年（一三三二）、院恵子院誉」とあり、当時東国に進出してきた院派（七条大宮仏所系）の仏師院恵の子で、鎌倉において父とともに活躍していたが、磐城においても造仏していたことが知られる。

「□□三年丙寅」は、指定当時「文永三年（一二六六）丙寅」と考えられていたが、惣善寺（常磐湯本町）の本尊阿弥陀如来坐像（県指定）の銘文「建武弐年（中略）比丘善来春秋七十九」の記事から、正中三年（嘉暦元年・一三二六）と確定した。

保福寺は住吉城主小川（北郷氏）刑部大輔の開基になるという。小川刑部は、始め北郷館（内郷内町）の城主で、文禄五年（一五九六）に住吉舘に移ったという。本像は正中三年（一三二六）小川氏の祖である岩崎隆連によって北郷の保福寺に安置されていたが、このときに小川氏が住吉へ移したものと思われる。

木造阿弥陀如来坐像（もくぞうあみだにょらいざぞう）　一躯

指　定　昭和六十一年三月三十一日
所在地　いわき市常磐湯本町三函
所有者　惣善寺

南北朝時代・建武二年（一三三五）
像高　四一・六㎝

この像の脚部と体幹部の裏にそれぞれ銘文があり、脚部裏には以下のように記されている。

□□（元徳）二年庚午十二月□廿□日□比丘善来七十□
春秋七十九
建武貳年乙亥正月廿四定（日）比丘善来需識
□□□七十九　是（時）性浅□□衛門（降連力）
□□

元徳二年辛未（ママ）十二月□□□□□□□□□□□□

銘文からこの像は、建武二年（一三三五）に完成されたものと考えられる。元徳二年（一三三〇）は、この像の造立を発願した年か、あるいは造立に着手した年にあたると思われる。なお「比丘善来」は、保福寺（小名浜住吉）の薬師如来坐像（県指定）等の銘文中にもみられる銘である。

左手を膝上におき、右手を胸前にあげ、それぞれ第一、二指頭を捻じ、右足を上にして結跏趺坐（けっかふざ）する。構造は頭体幹部を通して前後に二材を矧（は）ぎ、像底は上底式につくる。三道（さんどう）下を通る線で前後材とも頭部を割矧（は）ぐ。両肩先より地付まで通して堅に各一材を体側に矧ぎ、脚部は横に一材を矧ぐ。両手首を各袖口に挿し込み矧とする。

両手首より先は後補で、両手袖口部の材を欠失し、面部には焼損もみられる。『石城郡誌』によると、安永八年（一七七九）と明治の戊辰戦争の二度災害を受けている。像の損傷は、これらの時のものと思われるが、両頬の肉付きは豊かでひきしまり、衣文（えもん）の彫出も太く、力強い造形をとどめている。

木造明王形立像　一躯

指　定　平成十四年三月二十九日
所在地　いわき市勿来町酒井出蔵
所有者　出蔵寺

平安時代中期（十世紀）
像高　一五〇・八㎝

出蔵寺は大桜山蔵王院出蔵寺と称する、真言宗智山派の寺院である。

本像は、磐城三十三観音十番札所・出蔵観音堂に安置されている。一面八臂で、山形に髪を逆立てた怒髪をあらわす。やや右上方を向いた面貌は両眼を見開き、口を閉じ、牙をのぞかせ、怒りの表情をあらわにした姿をみせている。左肩より条帛をかけ裳をまとい、やや左足を踏み出し、腰を右に捻じて立つ。八臂は全て失われ、また両足首から先は欠失している。眼は彫眼、幅広の天冠台を彫出し、現状は素地をあらわす。

構造は頭体を通して一材で彫出された一木造りで、内刳りは施されていない。胸部と腹部は厚みがあり体躯の奥行きも十分で、量感に富んだ造形感覚をみせているが腰部以下は摩滅のためやや量感を損なっている。荒々しく重厚な造形は平安前期の作風を思わせるが、造立年代は十世紀と考えられている。

また、出蔵寺から分離した蔵皇神社に伝わる木造金剛夜叉明王立像（県指定）と同様に、本像もその技法と作風から在地で制作されたと考えられる。

なお本像は、その像容から明王として造られたものとみられる。

木造虚空蔵菩薩坐像　一躯

指　定　平成十五年三月二十五日
所在地　いわき市平下高久字志農田
所有者　虚空蔵堂奉賛会

鎌倉時代後期～南北朝時代
像高　八六・二㎝

下高久志農田の虚空蔵堂は、真言宗に属する満願寺境内の堂宇の一つであったが、明治初年に廃寺となり、堂宇だけが残り現在に至っている。

堂内に安置されている木造虚空蔵菩薩坐像は、単髻を結び、大きな木製の五山宝冠をいただく。宝冠は前面部を別材で彫り、頭部に載せ、背面部は本体から彫出されている。天衣、条帛をかけ、裳をまとう。右手は胸前にかまえ剣を持ち、左手の掌の上に宝珠を載せ、右足を上にして蓮華座上に結跏趺坐する。両耳後と体側を通る線で頭体幹部を通して前後に二材を矧ぎ合せた寄木造りの構造で、眼は彫眼とする。また三道、頭髪を彫出する。

現存する修理銘札により、本像は享保元年（一七一六）に修理されたことが知られ、銅製の大振りな宝冠と胸飾り、さらに木製宝冠の前面部、また両手指先の一部、両手持物、彩色はこの時の補修と思われる。

本像は髻が大きく、充実した面貌を現し、また胸・腹部も奥行きのある重厚な造形が認められる。全体にやや地方的な作風がみられ、在地の制作と考えられるが、この地方における虚空蔵信仰の広まりを物語る作例として貴重である。造立は鎌倉時代後期、あるいは南北朝時代に入ると思われる。

木造扁額「普門山禅長護国禅寺」「海會」　二面

指　定　昭和二十八年十月一日
所在地　いわき市小名浜林城字大門
所有者　禅長寺

安土桃山時代・天正七年（一五七九）
普門山額　縦　四六・二cm、横　八〇・五cm
海會額　縦　三四・〇cm、横　五六・一cm

普門山禅長寺は、磐城における臨済宗妙心寺派の名刹で、大同二年（八〇七）徳一の開基と伝えられる。文永年間（一二六四～七五）遠峰禅師が中興し、弘安年中（一二七八～八八）には亀山上皇の勅願所との伝承がある。また天正七年（一五七九）七月には正親町天皇の勅願所となり、江戸時代は朱印地三〇石を有し、多くの末寺を擁して、門前に下乗の牌をかかげていた。また中世には、鎌倉の建長寺とは本末関係にあった。

木造扁額の一は「普門山　禅長護　国禅寺」と三字ずつ三行に彫られ、額縁は比較的簡素である。その二は「海會」と横に檜板に彫られ、文字は漆箔押である。額縁は天地に雲竜、左右は雲文の彫刻があって重厚である。両額の文字はともに正親町天皇の宸筆である。

正親町天皇宸筆による寺号書の下賜は天正七年（一五七九）で、禅長寺住持は育芳正頤であった。これは当時の住職の位牌裏にある次の刻銘によって知ることができる。

当山開基特賜勅願処宸翰護国海会之華額　並諸刹位之徴命者也。惟時天正七稔己卯仲　冬念有八日　見住育芳正頤

また勅願寺については、正親町天皇の綸旨がある。

奥州岩崎郡普門山禅長寺事、任先規、可被属諸山之位、殊勅願地之上者、可奉祈叡算万安　宝祚延長者也、仍綸命如件、
天正七年七月十二日　　右中弁（花押）
前建長寺正頤和尚禅室

銅製鰐口（どうせいわにくち）　一口

指　定　昭和三十年十二月二十七日
所在地　いわき市田人町黒田字別当
所有者　満照寺

南北朝時代・明徳二年（一三九一）
径　一九・七㎝、厚さ　七・三㎝

鰐口は神社・仏閣の堂前につるす金属製の梵音具である。扁円形の中空で、下方に横長の口があるのでその名がある。鰐口の前には布で編んだ綱をつるし下げ、参詣者が綱を振り動かして打ち鳴らす。

この鰐口は青銅製小型で、表面外周の右側に「羽黒山満照寺法印宥保開山」、左側に「明徳二年辛未年」と刻銘があり、その中央には型式化した蓮華文（れんげもん）の撞座（つきざ）がある。

田人町黒田には円通寺（上遠野）の末寺、羽黒山満照寺が唐沢にあり、また、別当には同じく円通寺の末寺である明王山大聖寺があった。大聖寺は、村内の御斎所熊野権現の別当も兼ねていた。両寺は明治初年に合併して明王山大聖寺から山号を、羽黒山満照寺から寺号をとって、新寺を明王山満照寺と改称し、別当の大聖寺跡に建立した。

この鰐口は、明徳二年（一三九一）に法印宥保が羽黒山満照寺を開山したことを示す、室町初期の作として重要である。